

縁をつむぐ国際協力

特定非営利活動法人 JIPPO (十方)

巻頭言 貧困問題と国際貢献に取り組む

—JIPPO(十方)の願いと歩み—

中村 尚司 (JIPPO 専務理事)

貧困問題は、19世紀に経済学が成立して以来、繰り返し取り組んできたテーマである。国際連合は21世紀を迎えるにあたって、貧困削減こそ最大の国際的な責務であると宣言している。現代日本社会にとっても、深刻な社会問題である。発足したばかりの小さなNPO法人には、解決できそうにない巨大な難問である。だからといって、なにもせず手を拱いているわけにはゆかない。どんなにささやかな試みに見えようとも、できることから始めるよりほかない。

リーマン・ショック以来の深刻化する不況や雇い止めは、日本国内でも雇用不安をもたらし、住居を失い路頭に迷う人を増やしている。京都の橋の下で暮らすホームレスの人びとが直面する生活の困難は、グローバルな金融危機が引き起こした国際経済の困難とつながっている。京都の暮らしの困難は、アジア・アフリカで生きる人びとの貧困問題と無縁ではない。

2008年11月に京都府から認証を得たJIPPOは、内外の社会的な貢献を担いたいという願いから、浄土真宗本願寺派を基盤として発足した。宗教法人の枠組みを超えたNPO法人としての組織作りに取り組んでいる。1979年に発足した「曹洞宗東南アジア難民救済会議」を前身とする曹洞宗国際ボランティア会、それを継承したシャンティ国際ボランティア会(SVA)の活動を振り返ると、日本仏教の

既成教団組織から生まれたNGOとしてJIPPOは、およそ30年遅れの後発団体である。遅れて来た者の有利な点は、多様な活動領域を拓いてきた先進的な団体から学べることである。

とはいえ、常勤の有給職員1名、非常勤の有給役員1名から出発したJIPPOは、浄土真宗本願寺派からの支援なしには何も始められない状態である。人材と物資の両面で、いつまでも宗門からの援助だけを頼りにしているわけにゆかない。その一方で、このNPOの発足と活動が、浄土真宗に帰依する人びとの社会的な活動や国際貢献の在り方に対して、大きな刺激を与えることも期待されている。

眼前の貧困問題に取り組むために、ひと月に3日間、龍谷大学ボランティア・NPO活動センターと協力して、京都市南部の野宿者支援を始めた。同時にスリランカの農園労働者を支援するため、無農薬紅茶のフェアトレードを始めた。続いて、東ティモールのコーヒー生産者を支援する無農薬コーヒーの販売に取り組み、フェアトレードを多角化している。ミャンマーではサイクロン被災者を支援するとともに、学童に文具を届けたり、給食事業を補ったりしてきた。世界最大規模といわれるインドのムンバイ・スラムを舞台とする映画「スラムドッグ\$ミリオネア」(アカデミー賞作品)を上映するとともに、その原作者であ



インドの画家が描いた「ホトケ」像

るヴィカース・スワループ氏を招き、「平和と貧困を考える集い」を開催した。

国際貢献の一環として、スリランカの紅茶産地を訪ねるスタディ・ツアーの機会に、農園労働者の子供たちの幼稚園の校舎建設や遊具の新設も進めることにした。あわせて幼稚園教員の研修事業を行うなど、ささやかな教育事業も実施している。

タイの仏教寺院による社会貢献を学ぶ旅を企画して、「エンゲージド・ブuddiズム」の実践活動から多くの事柄を学んだ。その際、優れた僧職者の教えを得ることができた。ミャンマー国境近くで難民支援や環境保全に取り組む代表的な高僧として著名な日本人であるアーチャン・光男師も

その一人である。同師を招き、龍谷大学実践真宗学研究科と共同で講演会を行った。今後もタイの仏教寺院との交流を進める予定である。環境問題については、「アミダの森」の植林活動に参加して、中国内モンゴルの砂漠緑化活動を調査し、JIPPOが推進すべき方向について検討している。平和構築については、仏教者の役割を軸にして可能な道を模索するため、国際エンゲージド仏教ネットワークとの交流活動にも取り組んでいる。災害支援の分野では、ハイチ震災救援など海外の事例に取り組んでいる海外災害援助市民センター（CODE）の先進的な活動から学び、緊急支援に対応できるよう準備している。そして会員、協力者、支援者の裾野を広げることにより力を注ぐ計画である。

このようにしてNGOやNPOの運営に携わると、個々の事業や活動に必要な資金と人材に関わる悩みは尽きない。しかし、そのような事業経営の課題とともに、私たち仏教系のNGOは、仏教者として生きることの意味を問い続ける必要がある。もともとNGOという言葉は、政府代表を超えた働きを期待する国連憲章に由来する。NPOと

いう言葉は、出資者に利益を還元しないという米国税法上の規定に由来する。政府の意向に左右されないように、利潤極大化を追求しなくてもよい条件は、私たちの活動を政治的かつ経済的

●中国内モンゴ自治区出張の目的

その好都合な場を、ほんとうに活かし切れるだろうか。私たちJIPPOが取り組むべき、貧困問題と国際貢献の課題は大きい。

そこかしこに見える立木は、ほとんどすべてが榆（ニレ）である。

中国内モンゴ自治区出張報告 — 驀進する過剰開発の砂嵐に抗して —

2009年7月25日から8月2日の日程で、NPO法人「沙漠緑化アミダの森」の植林隊に同行し、内モンゴル砂漠緑化活動の成果を学ぶとともに、付随する問題点や今後の展望について意見交換を行った

NPO法人「沙漠緑化アミダの森」九州3事務局主催の「シリンホト第22次緑の協力隊」に同行し、故選一法理事長とともに植林活動に従事することを通じて、砂漠緑化の成果を学ぶ。あわせて植林活動に付随する問題や今後の展望について、日中双方の関係者と意見を交換する。

中国内モンゴ財政学院と龍谷大学経済学部河村能夫研究室との共同調査グループに同行し、内モンゴル草原の沙地化が進む現状を現地調査するとともに、その原因や当面の解決策について吟味する。

●調査の概要

7月25日に福岡国際空港で「シリンホト第22次緑の協力隊」と合流し、大連空港にて入国手続きをする。同日北京にて宿泊する。翌26日に空路にて蒙古自治区の首都フフホトに着き、夜行列車にてシリンホトに向かう。夜明けとともに、車窓から見るモンゴル草原は、ところどころ砂地がむき出しになっている（中国語の沙地）。

な制約から解放する。その意味では、事業の運営にとって、たいへん好都合な場である。しかし、

車窓からの景観が教えるシリンホト草原に固有の植生は、浅い砂地の上に広がる草地と榆の灌木である。

かつて北京の空を飛ばなかった野鳥が、オリンピック開催準備に伴う工場移転の結果、再び観察できるようになったのに、近年の内モンゴ炭田開発の結果、シリンホトの街には粉塵が舞い、野鳥も飛ばず、夜空の星も観察できなくなった。環境破壊の舞台は中央の大都会から辺境の自治区に移りつつある。

28日と29日の両日、「中日友好百年林区」へ赴き、障子松や山杏の苗木を植え、身長2倍くらいに生育したポプラやアンズなどの枝を剪定する。車で1時間半かかる行程の行き帰りに、地元の育才小学校に立ち寄り、就学支援の物資を届けたりする。学校や周辺の農家を訪問し、「アミダの森」が植林活動を行うだけでなく、地域住民の生活向上に貢献し、交流を深めている経緯がよく理解できる。



アーチャン光男師（左）と中村専務理事



内モンゴルで植林した森を整備する「緑の協力隊」

「シリンホト第22次緑の協力隊」が北京へ向かったのち、「アミダの森」中国支局を担っている王蒙志の体験談を伺う。その要点は次のとおりである。

シリンホト草原では、かつての遊牧民に50年間にわたって、牧草地がリースされている。沙地に木が育てば、砂漠化を抑制できるばかりでなく、牧民が成木の伐採権を行使できる。ポプラだけを植林すると、地下水位を下げる恐れがあるので、樹種の多様化を進めている。山杏、障子松、黄柳、椴条、楊柴などである。松本さん（植木職人）の助言を受けて、この地域に自生している榆の植林も進めたい。日本から植林に来ていただくのに最適の期間は、苗木の生育条件から見て、春の4月10日から5月20日と秋の10月10日から30日である。しかし、春は粉塵と砂嵐がひどく、慣れない人には植林作業が困難であろう。それに比べると、やや寒くなるが秋の協力隊に期待したい。

内蒙古の著名なラマ教寺院の門前町として発達した町の文化的な背景を知るため、寺院を訪ねて

「生態移民」を訪問し面接調査する。この調査については、日本学術会議の長命洋佑特別研究員が畜産統計の分析を含む詳しい報告書をまとめる予定である。現地調査に同行してくださった、中国共産党シリンホト市委員会組織部の呼和氏の談話を中心に、環境問題の要点のみを記す。龍谷大学経済学研究科博士課程在学中のサルラ氏が通訳をしてくださる。

草原の沙地化が進んでいるのは、食肉と牛乳需要に対応した牧民による増産が、かつての遊牧生活から定住化を促し、草地の負担を強めたからだという。長年、遊牧民は無主地を季節的に移動することによって、異なった植生の草原を維持してきた。しかし、人民公社制からの改革開放の一環である1989年の牧民への個別的な草地配分（30-50年リースによる）が、環境の負担を無視した畜産経営に向かわせた。経済成長をめざす「鄧小平の罌」ともいべきこの困難を克服するため、共産党では草原放牧からの「生態移民」政策による家畜の舎飼化を進めている。いわば合作社経営の再来であ

るこの政策には、中国内でも賛否の両論がある。

●JIPPOの取り組み案

1、シリンホトにおける「アミダの森」の植林事業は、地域住民から高く評価されている。樹種の多様化も進み、日中双方での多角的な交流活動も展開されている。「南無阿弥陀仏」という念仏は、モンゴル語で「オムマニバッドマーフォン」と発語され、仏像に手を合わせて唱えられている。その意味で日本仏教への親近感は強い。JIPPOとしても、今後積極的に参画すべきであろう。今後予定されているNPO法人「沙漠緑化アミダの森」の解散までに、貴重な経験を学びたいものである。早急に、両法人間の協議を進める必要がある。

2、草原の砂漠化を招いている環



支援物資の贈呈

境問題の主たる要因は、日本からの植林事業ではなく、中国経済の高度成長と民衆の生活向上が必要とする開発政策にある。所得の上昇とともに需要が拡大する、食肉と乳製品の飛躍的な増産を図るには、遊牧民時代に行われていた草原利用では不可能である。「生態移民」の成否はともかくとして、草原の環境保全には、新たな視点からの政策が必要とされるであろう。

★タイ・スタディ・ツアー★

“エンゲージド・ブディズムの実践現場を訪ねる旅” 実施報告

2010年2月7日～16日の日程で、JIPPO初めてのタイ・スタディー・ツアーを実施しました。社会活動をしているタイの僧侶に出会い、仏教の社会貢献の姿を目の当たりにした旅でした。

「エンゲージド・ブディズム」

の実践現場を訪問して

古寺瑞代（JIPPOスタッフ）

JIPPOのスタディツアーでタイの「エンゲージド・ブディズム」の実践現場を訪問した。歴史的には自分自身の解脱を求める上座部仏教が主流であるタイにあって社会貢献あるいは社会と繋がりを持ち自分自身の精神にも平安を求める「エンゲージド・ブディズム」の実践現場を訪ねることによって僧侶がどのようにして社会との関係を構築しているのかを理解したいと思った。今回の訪問先寺院は、ウォンサニット・アシュラム、ワット・プーカオトーン、ワット・パー・スカトー、パトムアソーク、ワット・パー・スナンの各寺院であった。

まず最初に訪問したのはウォンサニット・アシュラムであった。スラック先生は不在であったが、ウォンサニット・アシュラムに14年間勤めているモンタさんにアシュラム内を案内してもらった。当アシュラムは敷地面積はかなり広くバンガロー風の建物が敷地内に十数棟あり、ゲストルームが18室、50名の宿泊が可能である。1泊600パーツ（約1,800円）で宿泊できる。30名のスタッフがおおりその内8名のチームで食事の準備を行っていた。

次に訪問したのはワット・プーカオトーン（黄金の山）(Wat Phukhao Thong)であった。この寺院はカムキエン師 (Phra Acharn Kamkien) が住職を勤めており「プーカオトーン幼児開発センター」を運営している。「プーカオトーン幼児開発センター」は働く両親のための保育園である。この日は47名の子どもがあずけられており5名のスタッフが世話をしていた。通常は1歳から4歳まで100名ほどの園児を7:00～15:30(遅いときは18:00)まであずかる。寺院の敷地内のあちらこちらにクッティ（僧房）がある。今は乾季のため僧侶の数は少なく、4名の僧侶が得度のためクッティで起居していた。雨期の安居期には10名ほどの僧侶が滞在している。当寺院の敷地面積は250ライ（1ライは2反なので約495,850平方メートル）。自由に寺を散策した後、車で移動し午後1時過ぎにワット・パー・スカトー（スカトー森の寺）(Wat Pa Sukato)を訪問した。住職はパイサーン師であるが、当日は不在の

ためカムキエン師が我々の質問に答えてくれた。カムキエン師は基本的にはお釈迦さまの教えに従って、活動しており、以前は説教を重視した生活を送っていたが説教よりもしなくてはならないことがあることに気が付かれたそうだ。しなくてはならないことは環境保全であり、植林事業であった。実際に村人たちにこれらの事業に関する助言を行い村全体の発展に貢献しているので村人からの信頼と尊敬を得ているとのことであった。この寺院は無料で滞在することが可能である。1週間400パーツでカリキュラムされているコースもあるそうだ。

次に訪問した寺院はサンティアソク教団に属するパトムアソークであった。当寺院は1979年に2人の姉妹によって設立され、250エーカーの土地に村・農場・学校・店を持ちコミュニティを形成し、外部の力も政府の力も借りずに自立して運営している。何でもリサイクルをしており、リサイクル品を販売し販売収益は活動資金としている。信者たちはベジタリアンであるため托鉢では野菜をいただき、寺院内で野菜を栽培しほぼ自給自足の生活である。また「政治に参加することは民に仏法を授ける手段であり、政治家たちは私利私欲に走ってはいけなないので、仏法を身につけていな



僧侶とともにクッティの前で

ければいけない。よって政治をよくするためには仏教が必要である。」という考えのもとチャムロンを党首にサンティアソク党を結成し反タクシンをかかげ、政治にも介入している。



僧侶から話を聞く

今回訪問した寺院の最後はワット・パー・スナンであった。この寺院は20年前に1000ライの土地を近所の老婦人からカナダ人が無償提供を受け開院されたそうだ。教義はかなり厳しく①お金は持たない、触らない。②食事は1日1回で午前8時に取る。③パーティモッカ（仏陀時代の227ある戒律）を守る。など、授業の中で厳しく指導されるそうである。またバンコクにマーヤー・ゴータミ財団を所有し財団に集まる資金を財源として奨学金制度を取り入れて教育にも力を入れている。

当該寺院の僧侶であるアーチャン・光男師によると、特に使命感を感じているわけではなく、仏教の力で社会を変えようとは思っていないし、宗教が政治に介入することはよくないと思っている。「平和」希求が信条であり、心の平和を求めて活動をしているようだ。

訪問したどの寺院でもインタビューに応じてくれた僧侶たちは特に何の気負いも無く自然に社会参加、社会貢献をしているように

見受けられた。今回はこのような活動を実践している寺院側への一方的なインタビューであった。このような活動をしていない寺院、あるいは全く関係の無い団体や個人へのインタビューをすることによって、これらの寺院がタイ社会の中でのどのように位置づけられているのかを知りたいと思う。

タイ・スタディ・ツアー報告

厚地 寛（JIPPOボランティア）

タイについてまず感じたのは日本との生活文化の違いだった。タイの町にはどこにでも屋台が並び、ガソリンスタンドの横に食堂があるという日本では見かけないような街並みだった。そして、タイの町や寺院を訪ねてどこに行っても犬や猫がいるんだな、ということも思った。町中、寺院、屋台の食堂にさえも犬や猫が闊歩していて、日本なら保健所に通報されそうな環境でありながら、誰もそれを気にしている様子はなかった。とはいえ、犬や猫の側も特に人間を警戒するような様子はなく、それがごく自然であるがまさにそうなったというような光景だった。

タイにおける仏教はタイの社会と強い関連性、連続性を持っているものであり、男子などの場合は成人する前に一度は出家するのが当たり前の風習であるようだった。また、社会人になってからも出家して数ヶ月後に会社に戻ってくる、ということも簡単にできる体制が整っており、タイにおける仏教への根強い信仰を感じさせた。エンゲージド・ブディズムとは「社会参加の仏教」というよう

な意味であり、タイのお寺による社会貢献活動のことをさしているらしい。「らしい」というのはこの「エンゲージド・ブディズム」という言葉がタイ仏教にとっても外来語であり、まだ明確な定義の薄い、抽象的概念に近い言葉だからである。今回の旅で訪ねた場所では、その活動として植林活動や、奨学金事業などを行っていた。彼らの話で一番心に残った言葉は、14日に一部の参加者がスナン寺に不眠の行に参加するために宿泊したときに僧侶から聞いた言葉だった。一人の僧侶が周囲の木をさして「この木が何故切られずにいるかわかりますか？」という質問をされて、それに「わからない」と答えると「役に立たないから切られないんだ。役に立つ木は全部切られて持っていかれてしまう。私たちが役に立たないからここで僧侶をしている」というようなことを言われたと、次の日に参加者の一人から聞いた。その言葉は「彼らの生き方」や「僧侶であり続ける理由」への比喻であるように感じた。言葉のままに聞いてしまうとただの自虐的なジョークのようなその言葉に私は彼らの生き方、あり方に対する誇りすら感じていた。



ゴールデンテンブルの前で



アウン・ゼヤ・ミン寺子屋

ミャンマー視察報告

ミャンマーの寺子屋訪問

末本弘然 (JIPPO理事)

2009年10月13日～18日の日程で、ミャンマーの寺子屋三ヶ所を訪れました。主に貧困という観点からの現状把握と支援の方途を探り、JIPPOの活動趣旨の一つである国際貢献に役立てるための視察です。

■アウン・ゼヤ・ミン寺子屋

ヤンゴンの北西、ライン川を渡った所にある。教育を受ける子どもは約600人。年々増加傾向に。内、136人が住込み。その半数が少年僧侶。校舎が足りず建設希望とのことだが…、設計図を見ると1500万円以上かかる豪華なもの。寺子屋の特徴として授業の開始と終了時に、丁寧なお勤めがあり、週に1回、仏教の授業が僧侶によってなされる。ここは支援団体が増えてきているので、経済的な心配はない。水利は蓮池と灌漑用の人工池がある。

ここは浄土宗関係団体が今年1月校舎建設。制服買えない、教科書買えないという子が大半。食事寺が提供。

■シュエ・ジン寺子屋

ヤンゴンの南東、車で約30分のタンリン村にある。子どもたちは458人。住込み生活は36人で、内6人が少年僧侶。9時からのお勤めに参列。30分の丁寧なお勤めも、皆きちんと座り、礼拝していた。続いて食事があり、ご飯と豆スープ。純朴で、明るい子が多かった。寄付がないと、食事も粗末な

のだという。通いの子どもたちにも配るといふ。

ノートや鉛筆を寄贈した寺子屋。住職は、子どもたちにミャンマーの仏教・文化を大切にしたいと願う。



シュエ・ジン寺子屋

■カードーミー寺子屋

ヤンゴン川をフェリーでダラーへ渡り、そこから悪路を2時間かけてジープで行く。デルタ地帯のワーバラウトゥー村(人口約8000人)の寺子屋。雨期は別ルートで小舟を使っていくとのこと。自然と人間が調和した生活を送る。当

日、看護師2人が先遣隊で村人の健康相談と投薬を行っていた。53人が受診。インフルエンザ、皮膚炎、栄養失調の子らがいた。寺子屋の生徒は275人。遠くから通う子もいる。お寺の志と地元の協力者30人の寄付で運営されている

が、維持に苦慮している。せめて教師の報酬ぐらいは出せたら、との住職の願い。村人は、お互い協力して生活を支え合っている。素朴で温かい人たちの村。交通の便が悪

く支援もなかなか行き届かないようだ。何らかの支援ができたらとの印象。

以上、寺子屋3ヶ所で健康診断をしていて、重病の人が出たときには、適切に病院へ送ったり、薬を与えることができる。平素、定期的に行うことにより、住民も安心するとのことであった。

【講演要旨】 ガンジーは「非暴力とは人間による最高の力である。人間の英知の結集によって生み出され、とてつもなく高度な破壊力になりうる」と語りました。大規模な産業化よりも小さく中規模な産業と地産地消をめざし、限定的でバランスのとれた産業化と村落単位の農産業を推奨しました。これらのアイデアのいくつかは非効率的であると思われるかもしれませんが、基本的な理念は重要です。またガンジーは、貧困が

経済・政治の中央集権制を作りだしました。

現代のグローバリゼーションは喜んでばかりもいられません。



JIPPO「平和」と「貧困」を考える集い
在大阪インド総領事 ヴィカース・スワループ氏講演
「21世紀にいかされるマハトマ・ガンジーのメッセージ」要旨

2010年3月25日に開いた「平和と貧困を考える集い」は、在大阪インド総領事ヴィカース・スワループ氏(写真右上)の講演と同氏の原作をもとに作られた映画「スラムドッグ \$ミリオネア」を上映しました。スワループ氏は、ガンジーの哲学が普遍性と永続性をもち、時間を超越して21世紀のさまざまな問題に対し解決の糸口になるだろうと、熱く語りました。

コミュニケーション・情報・移動手段を容易にし、発展途上国では新しく多くの機会を人々に与えることになりましたが、逆に貧富の差がひどくなってしまった国もあります。多大な経済発展が世界で繰り返されているにもかかわらず、一方で人々は未だ貧困や識字率の低さ、病気や飢餓に苦しんでいます。ガンジーの言葉を借りれば「地球はすべての人の必要なものを与えてくれている。しかし、貪欲やむさぼりを満たすものではない」のです。

大規模な産業化は、安い品物とみんなに手の届きやすいものを作り出しましたが、そのコストについてガンジーは疑問を投げかけています。失業者が増え、持続不可能な環境と、人間と自然の均衡を壊してしまうという、消費中心の

人間から尊厳や自尊を奪い、没個性にさせってしまったと認識しました。ですから、本質的な貧困の根源というよりは、見境のない産業化と都市化を反対していたのです。

冷戦の終結は、私たちが願った「平和の配当金(軍事予算削減分がその国家にもたらす恩恵)」を生み出すことはありませんでした。ガンジーの考える対話の基盤には、忍耐と多元主義があります。「私は、壁に囲まれ、すべての窓がふさがれた家にはしたくない。いろんな土地からやってきた文化が、自由に出入りできるような家がいい。しかし自らの足元を見失うようにはなりたくない」とガンジーは言っています。他文化を許容する門戸を広く持つと同時に、自らに根差したものを堅持す

るということは、文明の衝突というなかでの唯一の対応策となるでしょう。他者に敬意をはらうだけでなく、他の文化、生活様式、信仰体系も尊重しなくてはなりません。本来宗教とは破壊の原因となるのではなく、安定への力となるべきものなのです。文明間の本物の対話へと導くのは、まさにこのような哲学であるといえるでしょう。

ガンジーの世界観のすべてが21世紀の現代に反映できるとは思いません。しかしガンジーと同じ結論に至らなくてもよいのです。ガンジーさえ最終的な結論を与えてはいません。私たちが自ら見出し、そして真実と共に歩むことをガンジーは願っているのです。

スリランカ「ハプタレー幼稚園支援事業」進行中

JIPPOはウバ紅茶のフェアトレード事業を行っているスリランカ・ハプタレー地区で、2009年度、幼稚園支援事業を展開しました。市立幼稚園の園舎改修や幼稚園教員の研修などをJIPPOがサポート。女性が能力を持ち、子どもたちが良い環境で育つことが将来の生活向上へつながることを期待しています。
(視察報告：高木美智代 JIPPO事務局)



ワークショップのひとつ

2010年3月29、30日の2日間、ハプタレー初の幼稚園教員研修が行われた。今回の大きな特徴は、初めてというだけでなく、地域で多く使われながら国内では少数派の「タミル語」によって行うのが大きな特徴だ。紅茶の大規模農園で働くタミル人は教育の機会に乏しく、生活は単調で、わずかな収入も父親の酒で消えていくという。教員が研修によって新たな知識を得たり情報を共有できる仲間が出来たりすることは大きな刺激になる。市長らは「こうしたチャンスを与えられたことを本当に感謝している」と感慨深げだった。

JIPPOは研修に必要な教材、運営資金を提供し、指導は日本人の馬場繁子さんを代表に1992年からスリランカ各地で幼児教育支援を行っている現地NGO「スランガニ基金」へお願いした。会場のステージには「本願寺たすけあい運動、JIPPO提供」と書かれた立派な横断幕が掲げられていた。

当日の参集者は26施設40名。ハプタレー市や周辺の公立幼稚園のほか地域の各紅茶農園にある私設幼稚園の若い先生たちが集まった。

初日は体を使ったコミュニケーションゲームや教育概論、文字練習の方法、歌とゲーム、工作などを行った。幼稚園の先生たちが子どもものようにはじけた笑顔で実習に取り組んでいた。自分たちの感動が子どもたちに伝える原動力になるだろう。

二日目は栄養学や救急法といった専門講習もあった。難しい内容も講師が参加者自身の生活と対比して考えられるよう工夫するなど、分かりやすい、質の高い講義を展開していた。

こうして参加者の真剣な取り組み姿勢と満足げな表情が終始見られるなか、全日程を終えることができた。参加者の感想もほぼすべて肯定的な記述だった。



ハプタレー幼稚園の遊具とグラウンド工事全景。右奥園舎に接し「オープンスペース」が出来る

一方、ハプタレー市立幼稚園の建設は雨季の天候に阻まれ遅れながらも日々工事が進められていた。改修部分のうちの園舎とグラウンドをつなぐ階段が完成し、遊具の土止めや地盤整備を行っていた。子ども用トイレや手洗い場は屋根や外壁、排水溝が姿を現し始め、職員用トイレは内壁を塗っていた。手洗い場は子どもが5人くらい並べる広さである。

これらの整備に続き、新しく増築する「オープンスペース」に着手する。ステージ状の施設で、出来上がるとグラウンド側からお遊戯発表会といった催し物を見ることが出来る。

工事は2010年夏には完成予定だ。8月のスタディ・ツアーで訪問し交流するのが楽しみである。

～事務局だより～
“お気軽にお立ち寄りください”。JIPPOの事務局の窓に大きく張り紙を出しました。その効果？か、営業の方や道を尋ねる方が以前より増えた気がします。ボランティアの方や学生さんたちが気楽にお茶を飲みながら交流できる“優雅なサロン”を夢見つつ、現実には、片付け下手でたまるばかりの書類にボー然としています。(み)

発行： 特定非営利活動法人 JIPPO
〒600-8501京都市京都市下京区堀川通花屋町下る
本願寺門前町本願寺内
TEL：075-371-5210 FAX：075-371-5240
(FAX番号が変わりました)
e-mail：office@jippo.or.jp
URL：http://jippo.or.jp